

2021年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 井手 裕子	職名 助教	学位 修士(看護学) (大分大学 2006年)
----------	-------	-------------------------

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	慢性期看護学 看護教育 コロナ禍における看護学実習

研究課題
<p>成人慢性期看護学の教育活動に関して、学生が慢性期にある患者および家族の特徴とその看護を理解するために、学内での演習とそれに連動する臨地実習での指導の在り方について考察する。また、コロナ禍において臨地実習の中止を余儀なくされているなかで、いかにして看護実践を学ばせるかについての検討及び実践を通して、今後の臨地実習指導について考察する。</p>

担当授業科目
<ul style="list-style-type: none"> ・成人看護学演習(前期) ・成人慢性期看護学実習(後期)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【成人看護学演習】</p> <p><看護過程演習(対面および遠隔授業)></p> <p>新型コロナウイルス感染状況に応じて大学のBCPレベルが変更したため、5月には一時的に遠隔演習となる時期があったが、特に混乱を招くことはなかった。</p> <p>演習自体は、1グループ5人編成で、2人の教員で5グループ(25名)を担当した。対面での実施の際は、グループダイナミクスによる効果を上げるために、グループワーク時に発言の少ない学生に意図的に声掛けを行い、理解度を確認した。遠隔になるとワーク時の他学生との交わりによる表情や態度などがほぼ把握できないため、対面時には特にその点は意識して関わり、個々の学生の特性について把握し、遠隔時の指導にもその内容を活用した。</p> <p>事例は例年通り、慢性期事例(肝硬変)と急性期事例(胃癌)の2事例であり、事例ごとにもう一人の教員と担当を変えて全グループ把握に努めたり、演習前後で教員間で個々の学生への指導等について調整を図った。</p> <p><技術演習(全日程対面授業)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全日程で対面での実践が可能となった。 <p>糖尿病食事療法の演習では、実際に患者指導を実践するという従来の形式で実施した。患者役として4年生(統合実習で慢性期看護を履修している学生)に参加を依頼した。指導場面では、看護師役と患者役の学生の間パーテーションを設置し、感染予防対策を講じた。</p> <p>術直後の演習では、今年度から、術後の清潔ケアの学習を取りくみ、全体での演習後、1グループの学生達のデモンストレーションを実施、学びを共有させた。</p>

授業科目名【成人慢性期看護学実習】

昨年度に引き続きコロナ禍ということで、2022年1月期のグループを除いてはすべて学内実習となった。

・学内実習

BCP レベルに応じて、全日対面のグループ、対面と遠隔が混合のグループなどが混在しており、それぞれのグループに応じて工夫をした。昨年同様に、模擬患者を設定しその模擬患者を教員が演じることで実習を進めていった。また今年度は、電子カルテ教材の導入を行い、実習経過とともに患者カルテがリアルタイムで閲覧できるようにした。

教員が患者を演じる際は、実際の病棟での患者の生活をイメージし易いように、個々の患者に応じたベッド周囲の生活物品の配置、医療器機の装着(静脈持続点滴や心電図モニターなど)、治療に係る装具の装着(圧迫骨折患者の腰部への軟性コルセット装着など)また、慢性疾患患者における家族支援の学習のために、他教員に依頼し患者家族を演じてもらった。

多職種連携の視点の学習に際しては、一部のグループの学生は、協力の得られた病院の地域連携室勤務の看護師の講義を遠隔(Zoom 利用)で受けることが出来た。講義終了後には学生からの質問の時間をとり、直接現場の看護師への質問ができ貴重な体験となった。また DVD などの視聴も取り入れ、看護師の役割についての学習を強化した。

例年、看護師国家試験における状況設定問題の得点率が低い傾向にあることに加え、臨地での実習体験が乏しいことを鑑み、実習で使用した模擬患者の看護に関連する過去の国家試験問題 10 問ほどのテストを実施し、解説などもまじえながら、「状況設定」という出題形式に少しでも慣れさせるよう工夫した。

・臨地実習 1 グループ(6名)のみ (2022年1月期)

この期間の学生 6 名のみ、約 2 週間に渡って臨地実習を実施することができた。事前のおよび実習中の健康チェックや感染対策を入念に実施した。内容としては通常の実習に準ずるものであったが、当該学年の学生は 2 年ぶりの臨地実習であったため、最初の 2 日程度を、臨床側の協力を得てシャドーイング実習を実施した。シャドーイング実習の本来の目的は、慢性期看護実習を行うにあたり、現場を知る・現場に慣れるという事であったが、結果としては、目的の達成もさることながら、早期に現場のスタッフとのコミュニケーションが図れ、効果的な実習指導が得られた。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等 (任期)	加入時期
聖路加看護学会		1996年 4月
日本看護研究学会		1996年 6月
日本看護学教育学会		1998年 4月
日本看護診断学会		1998年 6月
日本糖尿病教育・看護学会		2003年 8月
日本看護科学学会		2008年 10月
日本慢性期看護学会		2017年 7月

2021 年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共 同 研 究			
研 究 題 目	交付団体	研 究 者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個 人 研 究			
研 究 題 目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備 考

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等

学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

<2年生アドバイザー>

① 個別面談の実施

昨年に引き続き新型コロナの影響のため、当初対面で実施していた新年度の個別面談が5月中旬からは遠隔での実施となった。この学年は、昨年度の入学以来遠隔での講義を強いられ、キャンパスでの大学生活を送っていないことから、特に大学生活における不安の有無やその内容に注意しながら面談を実施した。

県外出身の学生の中には、1年次は実家で遠隔授業を受けていたが、2年次になってようやく一人暮らしを始めて、不安の強い学生やそのことにより心身に不良をきたす学生などもあった。その際は、当該学生の保護者、学生総合支援室などとも密に連携を図り、学生の支援に努めた。

② コロナワクチン接種に関わる支援

7月下旬および8月下旬に、大学の職域接種による学生へのコロナワクチン集団接種が実施された。接種の実施に際して、2年生の接種希望の有無、接種券番号の確認、大学での当該部署との連絡調整、接種当日の学生誘導など、ワクチン接種が迅速安全に実施できるように支援した。

③ 保護者会の企画・実施

昨年同様、新型コロナの影響で、ZOOMを利用したオンラインによる保護者会を12月上旬に実施した。学生同様、遠隔や対面が一定しない異例の学習形態が進行する中で保護者も様々な不安を抱えていると推察し、3年次に向けての学習の取り組みや実習状況などについての説明を行った。特に実習については、実際に臨地での実習を体験した学びについて学生4名にも参加してもらい、学生の生の声を保護者に聞いてもらった。事後のアンケート結果では、昨年同様開催時期や開催方法およびプログラムの内容については9割前後の保護者が「適当であった」と回答しており、概ね有効であったと考える。

④ 模擬試験実施

新型コロナの影響により実習の実施時期の変更が重なり、模擬試験の実施時期がずれ込み、3月末の実施となった。実施内容はこの時期に実施可能な業者模試(解剖生理学・病態生理学)を対面で実施する予定である。この結果を次年度の3年生アドバイザーと共有し今後の学習指導に活用する予定である。

<国家試験対策委員>

① 模擬試験

昨年度からの新型コロナ影響が続く中、今年度は模擬試験をできるだけ対面で行えるよう、また、遠隔にも対応できるように業者選びや実施月などの計画を早期に実施した。その結果、7回の実施中、9月実施の模試のみがWebによる実施となったが、それ以外の6回分は感染対策（登校時の検温、ソーシャルディスタンスを保つために実施教室を2～3分割にし、マスクを外すことを避けるために昼食は挟まず前中だけの実施など）を十分に配慮しすべて対面での実施が可能となった。

② 強化学習

昨年同様毎回の模擬試験終了後に、低得点率の学生を対象として感染対策を講じながら強化学習を実施した。強化学習対象者の傾向として、学習時間の絶対的不足に加えて、基礎学力が定着していない、自己に適した学習方法が修得できていない、設問の読解力が乏しい、などが挙げられる。従って、集団の指導ではなく個々の学生の傾向に応じた対応が必要であり、回答の正誤のみに注目するのではなく、なぜその回答を選択したのか、その根拠について確認するようにした。またその学習時間の成果を評価するために、10問程度の小テストなども実施することもあった。

コロナ禍での2年目の学習であり学生は比較的このような環境下での学習には慣れてきているようで、昨年ほど、学習環境による精神的ストレスを抱える学生は減少しているようであった。